

皆さん、海と言えれば何かいふかぶでしようか？私の心に思ふ浮かぶのは、高校3年生の頃のことです。大学入学試験が終わる、私は深夜の列車に乗り込んで港の釜山におもむきました。翌朝、寝不足の状態であらう初めに見た海。その第一印象はとて力強いものでした。海辺には風が吹いていて、海は常に一つの塊として動いていました。表面には波があるのですが、しかし、その底には人間をちっぽけなものに感じさせる物

『白鯨』(上中下)(ハーマン・メルヴィル著、八木敏雄訳、岩波庫、2004年、計3685円(税込))



司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は崔周永神父様(事務局長補佐、教区協力)が担当。

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は崔周永神父様(事務局長補佐、教区協力)が担当。



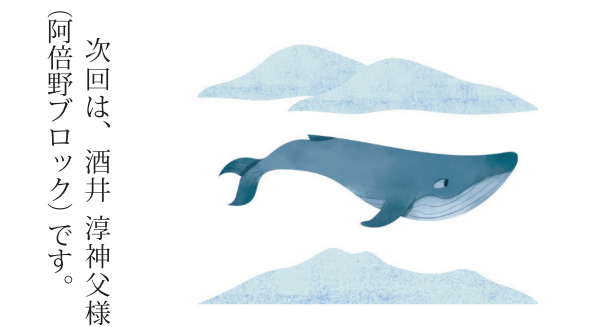
凄いが潜んでいることを直感したわけです。海は、その広さと深さにより、絶えず人類を魅了してきました。広大な海で、波風と戦いながら行ってきた人類のいろいろな活動は世界を著しく変えてきました。そのなかに、捕鯨がありました。鯨を実際に見たことはありませんが、大変知能の高い哺乳類だと聞いています。この巨大な生物を、良い油が取れるからとパン捕獲していた時代がありました。小説の『白鯨』はこの時代に生まれた小説です。

米国人作者のハーマン・メルヴィルは、どちらかというと不運な人生を送った人でしたが、彼の作品『白鯨』(1851年)は、19世紀に書かれた小説のなかで最も偉大なものではないかと思ひます。なぜなら、海に潜んでいる巨大な鯨、その鯨を殺すことに必死になっている捕鯨船の船長と、巻き込まれていく船員たちが見事に描かれているからです。

自分の片足を取っていった鯨に対して、猛烈な怒りを感じている船長は、捕鯨船に乗っている自分の本来の仕事さえ忘れているようにも見えますし、ただ一つの目的――白い鯨を殺すことに夢中になっている船長に襲いかかるであろう不吉な運命を感じながらも、ずるずると引つ張られていく一等航海士。観察者のような、語り手のような主人公。人間の執念が巻き起こす事態を最大限にまで描いているのが『白鯨』だと思ひま

す。本を読み終わった時、悲劇の結末に、人間についていろいろと考えさせられ、人間の内面こそ広い海ではないかと気づきました。その人間の内面にある、得ての知れない恐怖やその反動としての執念が、白い鯨という形で表れているのではないかと思ひたのです。実際に、人間の精神世界は広くて深い。その中を泳いでいる、あるいは隠れているさまざまなものが、まだ名前を与えてもらえず、そこで唸っているのかもしれない。

神様を呼び、一緒にいてくださるようにと切に願う場所が、この人間の内面という海ではないでしょうか。その心底で動いている何かを私たちは掴んでいるのでしょうか？ もしくは、揺らぐ船の上でまだ探しているのでしょうか？人間探求書である、小説『白鯨』、一読をお勧めいたします。ちよつと長いですが。



次回は、酒井 淳神父様(阿倍野ブロック)です。

神様を呼び、一緒にいてくださるようにと切に願う場所が、この人間の内面という海ではないでしょうか。その心底で動いている何かを私たちは掴んでいるのでしょうか？ もしくは、揺らぐ船の上でまだ探しているのでしょうか？人間探求書である、小説『白鯨』、一読をお勧めいたします。ちよつと長いですが。

本コーナー、今年1月号で紹介された『野崎観音の謎(神田宏太著)』が「入手できない」との情報が、紹介者の竹延真治神父様のもとに寄せられました。著者ゆかりの野崎キリスト教会の好意で、カトリック大東教会が若干冊を預かっています。購入したい方がおられましたら、同神父にお問い合わせてください。

竹延神父様より
「携帯電話080・3776・4430の留守番電話にお名前と『野崎観音の謎』希望」のメッセージをお入れください。後ほど神父より連絡させていただきます。」



「信仰の時間」

ABCラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

1月担当：松浦 謙 神父 (みなとブロック)

日本26聖人殉教者 少年トマス小崎の手紙

(30日放送分より)



お知らせ

本コーナー、今年1月号で紹介された『野崎観音の謎(神田宏太著)』が「入手できない」との情報が、紹介者の竹延真治神父様のもとに寄せられました。著者ゆかりの野崎キリスト教会の好意で、カトリック大東教会が若干冊を預かっています。購入したい方がおられましたら、同神父にお問い合わせてください。

竹延神父様より
「携帯電話080・3776・4430の留守番電話にお名前と『野崎観音の謎』希望」のメッセージをお入れください。後ほど神父より連絡させていただきます。」

(編集部)

2月5日は日本26聖人の殉教の記念日です。1587年キリシタン禁教令を發布した豊臣秀吉は、1597年外国人宣教師と日本人キリシタン24人を京都で捕縛し、1月3日、見せしめのため京都、大阪・堺で引き回しをしました。1月9日にそこから長崎に向けて900キロに及ぶ道のりを歩かせました。途中で2人が加わり、2月5日、彼らは長崎の西坂の丘で十字架に縛りつけられ、槍で両脇を突かれて息絶えたのです。

冬の寒い日、京都から長崎に向かう遠い道のり、彼らはこの間どのようなことを考えたのでしょうか。この一行の中に14歳のトマス小崎という少年がいました。1月19日、三原でトマス小崎はそつと別れの手紙をお母さんに書いたのです。その手紙が母親の手に渡る機会はありませんでしたが、同じく処刑された父親のミカエル小崎の衣服の懐に縫いつけられていたのが発見されました。それは次のような内容でした。

「神の御助けにより、この手紙

をしたためます。パードレ(神父)以下われわれ24名は、列の先頭を行く制札に書かれた判決文のように、長崎で磔の刑を受けるため、ここまでまいりました。わたしのこと、またミゲル父上のこともご心配くださいませように。パラISO(天国)ですぐお会いしましょう。お待ちしております。たとえパードレがいなくても、臨終には熱心に罪を痛悔し、イエズス・キリストの幾多の御恵みを感謝なされば、救われます。この世ははかないものですからパラISOの全き幸福を失わぬよう、努力なさいましょう。人からどんなに迷惑をかけられても耐え忍び、すべての人に大いなる愛徳を施されますように。わたしは母上のことをわたしの主にお願ひいたしましょう。母上からわたしの知っている人びとによろしく申し上げてください。罪を痛悔するのを忘れぬよう、再び重ねて申し上げます。

イエスは、弟子たちも迫害され殺されることもあると断言されました。けれども弟子たちに次のよ

うにも言われました。「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もしない者どもを恐れてはならない」(ルカ12・4)。わたしたちは新しい命が約束されているのです。トマス小崎が「パラISOの全き幸福」と呼んだ、永遠のいのちです。

トマス小崎は「すべての人に大いなる愛徳を施されますように」と母親に向けて書き、どのように生きるかを教えています。愛徳を施すとは、隣人を自分のように愛し、敵をも愛することでした。それがイエスの教えでした。たとえ血を流さなくても、愛の心をもって人と関わること。苦しむ人に寄り添うこと。そのために自分が苦しむこともいとわないことです。それは人のために自分を捨てること、与えることですから、ある意味で血を流さなくても「殉教」であるといえるでしょう。

26聖人は皆、弱さをもった人間でした。死への恐れもあったでしょう。きっと歩きながら互いに

励まし合い、祈り、イエスの言葉や教えを思い起しながら一日一日歩き続けたでしょう。

イエスの山上の説教の言葉です。「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。わたしのためにののしられ、迫害され、身におぼえのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある」(マタイ5・10~12a)。

彼らのうちに働いた神様の力と恵みを思わずにはいられません。殉教者を栄光に導いたキリストの愛が私たちにも注がれていることを信じながら日々を歩んでまいりたいと思います。

